

平成12年 5月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

## 日常の中の仏教語

青梅市内には、阿弥陀如来を本尊様としている寺院がいくつかあります。その阿弥陀如来に関して日常に使われている言葉があります。帽子を「あみだに被る」といえば後ろにずらして前のひさしの部分を上に持ち上げた被り方です。阿弥陀如来をはじめ仏像には、光背という背中から頭にかけて光をイメージしたものが付いています。よく後光が差すとか言いますが、その後光が光背です。さて、阿弥陀如来のその光背は少し前のめりに付いていてその状態に似ているから、「あみだに被る」という言い方ができたといえます。その阿弥陀如来の光背は、光をイメージしているので放射状に細い棒を使うこともあります。よく太陽を子供が書くと、丸い太陽の周りを線で放射状に書くのと似ています。その放射状の棒で昔は籤くじを引くことがあったそうです。今は「あみだ籤」といえば階段状のものを横にいくつか連ねて、互い違いに横棒を引きますが、本来は放射線に集めた棒から一本引くのがあみだ籤だったそうです。その言い方も阿弥陀如来の光背から来ているといえます。また、仏像には色々な手の形があります。それを「印」とか「印相いんそう」といえます。お釈迦様の像の場合、法界定印ほっかいじょういん（坐禅をするときの手の相）という印で坐禅をした座った状態で、お腹の前に右手の手のひらの上に左手の甲を重ねて、軽く両手の親指を合わせるものです。左右が逆になる像もあります。阿弥陀如来ではどうかというと、同じように坐禅をした形にして手を重ねます。が、人差し指と親指を合わせて（OK！というサインに使ったりする形です）左右の人差し指同士と親指が触れ合います。この印を上品上正印じょうぼんじょうしょういんといえます。人差し指ではなく中指と親指で輪を作ると中品上生印ちゅうぼんじょうしょういん、薬指だと下品上生印となります。言葉で説明するのは難しいですが、胸の前で人差し指と親指を合わせたOKの形で、両手を並べて手のひらを見せるものを說法印といい、この形だと上品中生じょうぼんちゅうしょう、指を同じように変えていって中品中生ちゅうぼんちゅうしょう、下品中生げぼんちゅうしょうといい、右手をそのままにして左手を下にたらし手のひらを見せる形が来迎印というもので、やはり指の組み換えで上品下生じょうぼんげしょう、中品下生ちゅうぼんげしょう、下品下生げぼんげしょうとなります。合計九通りの印になります。この上中下の違いは、よく修行をして行いも素晴らしい人から、さっぱり修行も行いも良くない人までどんな人でも救いますよ、ということを表しているといえます。その印相の表現から「上品な人、下品な人」という言葉が使われ出したといえます。因みに鎌倉の大仏様は阿弥陀如来で、上品上生の定印を結んでいます。阿弥陀如来に関するものだけでも、以外と日常の中で使われている言葉があるものですね。

(文責 棚橋)

・文化ニュース第150号「棒屋」の表記の一部に誤りがありましたので、訂正してお詫びいたします。 (誤) 三木鋏 ⇒ (正) 三本鋏